

優秀賞

想いを語り継ぐ

福島県いわき市立中央台南中学校

3年 鈴木 蒼空

「語り部」を引き受けてしまった。私は人前で話すことが苦手だ。とても緊張する。できることならば避けたい。それなのに引き受けてしまった。

東日本大震災から14年が経った。「いわき語り部の会」は、その災害を風化させずに伝え、災害からの学びを共に考える活動をしている。今回、いわき震災伝承みらい館で、「中学生語り部講話」が開かれることになり、私は、その中の中学生語り部として、総合的な学習で震災について調べたことや考えたことを話すことになった。

私は、2010年生まれ。震災が起きた時は10ヶ月だった。だから、その記憶は全くない。そんな私たち中学生が語り部をする。本当に震災のことを伝えられるのだろうか。うまく伝えることができず失敗したらどうしようと不安がとても大きかった。でも、挑戦してみようと思ったのは「語り部、みんなの世代がやってくれるといいんだよな。」この言葉がずっと心に引っかかっていたからだ。これは「いわき語り部の会」の石塚さんの言葉だ。石塚さんは、あの3月11日に起こったことを私たちに教えてくださった。

私は、とても大きな津波被害を受けたいわき市薄磯で生まれた。震災後、薄磯から離れて別の場所で生活しているが、私はずっと薄磯とつながりながら育ってきた。薄磯出身の父は、魚釣りや磯遊び、海水浴など薄磯の海にいつも連れていってくれた。薄磯は、私にとって大切な特別な場所なのだ。だから、自分にも何か語り部として伝えられることがあるかもしれないと思った。それで挑戦することに決めた。

語り部として伝えるためには、もっと薄磯や震災のことを知らなければいけないと思った。祖母に話を聞いた。祖母は津波の被害にあった自宅の写真を見せてくれた。その写真を見たとき私は大きな衝撃を受けた。1階は波の力でえぐりとられ、柱はむき出し、何とか残った2階は今にも崩れ落ちそうになっていた。信じられなかった。でも、どれほど大きくて強い津波だったのかひと目で分かった。「いわき語り部の会」の大谷さんにお会いした。「どこに住んでいたの。」と聞かれて、祖母から聞いていた「南街地区」と答えると、『あんばさまの町図絵』で私の自宅があった場所を教えてくれた。あまりにも海に近くて驚いた。その様子を見ていた石塚さんが「よかったな。あなたの歴史だもんな。」と言った。私の歴史が薄磯にはあるのだ……。何だか薄磯の人たちとのつなが

りがまた少し深くなつたように思えた。薄磯で生まれ育つた祖母や父、大谷さんの歴史もまた薄磯にあるのだ。薄磯はかけがえのない特別な場所なのだ。

だから、私も伝えようと思った。たくさんの人を前にすると心臓が飛び出しそうなほど緊張したけれど、家族や薄磯の方々と話し、学んだことや考えたことを精いっぱい話した。自然はきれいで楽しいもの。でも、人間の力では勝つことができない強さや怖さもある。だから、自然を畏れ敬う気持ちを忘れてはいけないと震災から学んだこと。震災を経験したからこそ赤ちゃんもお年寄りも子どもも大人も体の不自由な人もみんな無事に避難することができる災害に強いいわき市、自然豊かで風光明媚ないわき市も実現することができるのではないかと考えたこと。そして、私は、やっぱり薄磯の海が大好きだということを伝えた。うなずきながら、時にはメモを取りながら「そうだよね。」とつぶやきながら聞いてくださる方たちがいた。中学生のつたない私の考えを真剣に受け止め、聞いてくださったことがとてもうれしかった。

「語り部」を経験して気付いたことがある。今は、震災のこともインターネットで簡単に知ることができる。いつ、どこで、どのくらいの規模の地震だったのか。各地の被害状況などの事実を知ることができる。しかし、事実だけでは分からぬことがある。それは、実際に経験した方の思いだ。私もそうだった。インターネットで調べているだけではいまひとつ実感がわからず、どこか他人事のようにさえ感じた。家族と撮りためていた写真を見て震災のこと話をす。いわき震災伝承みらい館で薄磯の方と会って当時の自宅のことを教えてもらう。家族や石塚さん、大谷さんの言葉にはさまざまな思いが込められていた。思い出したり、言葉にしたりすることをためらうような悲しくて苦しい震災の記憶もあるのだと思う。それでも私に真っすぐに伝えてくれた。石塚さんのあの言葉が語り部に挑戦する私の背中を押してくれたのだと思う。思いが込められた言葉は相手の心に響き伝わる。自分の考えを言葉にして伝えることは大切なことだと強く思った。大好きな薄磯の未来に向けて私も学び、伝え続けていきたいと思う。